

生祠研究より見たる神仏二教と基督教

伍言 加藤 玄 智

前 編

私は本誌に於て度々生祠研究の未発表の方面を主として公表したが、今回は病のため中止して居った継続関係の問題を一寸休んで仏教と神道との生祠研究的考察より見た私見を茲にかい摘んで衝口発言してみよう。日本では昔から今日迄印度の宗教と云えばすぐ様夫は仏教なりと理解されて居った。夫は恰も支那の教えといえは直様孔子教老壯の学等と思われて居ったのと同様の趣きがある。然し能く考えなおしてみると後者は中国本土に出来上った教えであつて、是は支那型の正範であるが仏教に至つては印度の伝統的正系派には属してゐない。夫は全く傍系である。木で云えばヒコ生え、富士山で云えば宝永山といったところだ。其理由は印度民族の正系的流伝は遠く紀元前何千年かの昔から存して居つたところのベーダ(吠陀)の聖典に第一歩を起し、夫がバラ門(婆羅門)教の聖俗二門に分れ、其聖教たる哲学的宗教に迄発達し夫を幾多のウパニシャッド聖典に現わし、律法教としては是と並んでマヌ法典中に現われたバラ門教として伝承され、夫が次第に変遷して印度教即ちヒンズー教となり夫が基督教及び回教即ちイスラム教等と結合して今日の広い意味での印度教が成立したのだ。是だけ話せば印度の宗教即仏教と早合点することは出来ないのは明瞭だ。周知の通り印度には其民族に四つの階級があり、バラ門教の隆盛時代にはバラ門族という種族が其宗教專

管の民族であり、夫以外の種族は宗教の事項には嘴を容れる事が出来ない仕組になつて居つた。上記ウパニシャッド隆盛の時代には如何なる事を以てバラ門教の極地理想と考えられて居つたかというのと、一般的に云えば梵天(男性)、特殊的に云えば梵(中性)の本体と修業者たるサヌヤシンと融合合体して此二者一体となつた処をウパニシャッドの哲学宗教の究竟地大悟の世界と受取られて居つた。

一言以て是を云えば「修業者は我は梵なり」に大悟徹底した時を以て宗教の目的を達し得たところで此境界を仏教語を以て云い現わせば無上覚者ということになる。然るに仏教の教祖釈尊はバラ門族ではなく是と全く種職を異した武士階級の出で、其一王族であつた。此方が不思議にも王位を捨てて修業僧サヌヤシンの修業をバラ門教圏外に於て独り自から修業し終つて梵其もの即ち無上覚者となられ其無上覚者のことを簡単に覚者即ち梵語で仏陀(ブツダ)と云われるに至つた。後世此点を達観した仏教の僧肇師は註維摩詰経に於て「仏を真梵天となす」と喝破したのも此立脚点から来たものである。振返つて云えば梵即仏陀に外ならないが、釈尊は一と先づ梵を離れて仏教という新宗教を興隆されたから、教主其ものの立場から云つても又其教主を梵なる神と言葉では云わなかつたが、畢竟夫に外ならないところの釈尊という人身を持つて居つた。無上覚尊という仏陀に帰依し歸命するといふところに「南無歸依仏」といふ釈尊左右直弟子の信仰となつて諸弟子の仏教信仰が興つたのである。此仏陀は釈尊の現身に外ならないが、仏教の専門語で云えば応身仏と名付けられて居る。他の言葉で云えば生き神釈尊に外ならないのである。故に仏教の興りを尋ねれば釈尊自身から云うても左右の直弟子からみても教主を生祀するところに始まつたと云える。そうなつて来る。釈尊が存命中住居されて居つた竹林精舎又は結孤独苑精舎所謂堂塔即ちお寺は釈尊の生祠とも称せられるのである。斯様に考えてみると仏教は日本の神道と同様に一方から云えば生祀生祠に終始して居つたとも云えよう。是を私は名付けて神仏二教は人即神教ヘン、カイ、パンシーズムと云う私製の新術語を以て呼び、此二教を一は印度、一は

日本と云う違つた車輛を同一軌道に乗せて走らせて居るものと見る時は異輛同軌道型の宗教様相を呈するものと見る。是と相對して基督教は後に至つて触れようと思うが、異輛異軌道型の宗教と命名する事が出来よう。此点を明かにするために私は神道の生祠の一例を挙げることが出来る。夫は信州伊那郡の矢彦神社境内に祭られてある明治宮と云う生祠の実例である。矢彦神社は旧社で幕府時代には其造替の時には木曾の御料林から材木を拝受して新建築を試みたものだった。然るに維新當時には此慣例が破られて其何年かに一度の造替用の材木が木曾御料林から下附されぬ様になった。當時の神官倉沢清也氏は神道は勿論熱心な愛国者であつたため是を憂慮し、當時の宮内大官にも知合いがあつたため是を通して旧例を回復することを依頼した。事偶々明治天皇のお耳にも達し聖慮の深い思召から敬神の実を挙げさせるお手本として、料材下附の恩命に遂に浴し得た。時は明治二十四年であつた。茲で倉沢神主は歡喜踊躍し直ぐ様矢彦神社境内に東京宮城遙拝の遙拝殿を設けて、そこから遠い宮城を礼拝すること、恰も積尊と居所を異にする仏弟子が諸精舎留錫の積尊を遙拝すると同様の氣分で明津神明治天皇を矢彦の人々は遙拝して居つたのである。

然るに時の模様が変わつたので倉沢神主は其遙拝殿を神社の奥所地に移し、是を改築して明治宮と名付ける天皇の御生祠とするに至つた。其聖なる奥の院は矢彦神社を参拝する信者が矢彦神社を通して其奥地に在す明治宮即ち明治天皇の御生祠を礼拝し得る様に計畫的に建立されて居る。茲にも形を異にして精神を同一にする仏教と神道との生祠礼拝の形式が符節を合すが如きものを持つて居るものと看取される。仏教にせよ神道にせよ此宗教發達の階段に於ては最早自然教期の宗教ではなく文明教期に於る宗教發達の階段に達し來たつて居ることが分る。何となれば仏教は釈尊の古い形式の教えであると見られるところの八正道の道德と宗教との調和説法の修業の上に成立つものであるし、矢彦神社の場合は明治天皇の敬神と御慈愛の恩頼即ちミタマノフユに淵源するものであるが故に、是又清明正直心の

発現で、文明教期の神道が至誠教其ものに外ならないことを表示して居るものと云えよう。此至誠教が聖なる人を通して現われた場合には私は是を偉聖教即ちヘイデオシーズムと呼び男子を神として祭つた場合は此を聖雄神教ヘイデオシーズム、オブザヂバイン、メールと名付け、女性の場合には総て是を聖嬪神教即ちヘイデオシーズム、オブザヂバイン、ヒーメールと私は新術語を以て呼びたいと思う。但し矢彦神社の明治宮に付いては其詳細は拙著「本邦生祠の研究」を御覧願いたい。茲に於て狭く云えば基督教広く云えばヘブル又はイスラエル、アラビヤ系統の宗教の上に一言私見を述べることを略する訳にいかないから次号に一寸是に触れておこう。

後編

即ち新旧聖書の記事から考えて、古代イスラエルの宗教が国民的汎一神教時代に在つては其宗教は自然的宗教時代を脱せず、神話に掩われていたが預言者アモス、ホセヤ、イザヤ、エレミヤ等の進んだ宗教信仰をもつて来た預言者達の宗教信仰は道徳方面から見ても、又世界観の上から見ても進んだ宗教圏内に入り、文明教期の宗教となつてイエス時代の基督教に接続するのである。是等預言者教は唯一神教としても差支えなく、イエスも又夫を受継いで父なる天の神に対して唯一神教の信仰を抱いて居つたのである。又回教即ちイスラム教を出した紀元後凡そ五百年代のアラビヤの宗教は如何とみれば同じセム系統の宗教であつて、極端に又完全にアラアの唯一神教を信奉して居つた。イスラム教祖のモハメッドさえ単なる人間としての預言者唯一神のアラーのみ教えを人々に伝道する人間に過ぎないと信ぜられて居つて、神人の性質は截然として切離されて居つた。夫は無条件的唯一神教だつた。又昔及び今日のイスラエル民族についてみても、バビロン幽囚時代以後の流離民族としてのイスラエル人、所謂「打ち散らされたもの所謂

デアスポラとなった以後のイスラエル民族の宗教は国は亡びたけれど其民族は亡びず、イスラエルの民族教としてヤ
ーベエ神の宗教信仰を堅持して来て以て今日の新イスラエル民族迄続いて来て居る。故にアラビヤ民族は勿論、古新
イスラエル民族は唯一神教の標本的信仰者である。但し純粹の意味での普遍的世界的特色のある宗教としては不十分
なるものをイスラム教の如きは有して居る。イエスの奉じて居った宗教の如きも唯一神教の特色は十分あつてもイエ
ス自らも言った通り「イスラエルの迷える羊」即ちイスラエル民族を救うための宗教とイエスは思つて居った。
然るにイエスは遂に死刑に処せられたが、其遺骸を葬った墓場から三日経て昇天した事実をマリヤと言う女性が墓所
が空っぽになつたのを見て深く昇天を信じ、イエスは父なる天の神の子として昇天してしまつたのであると固い信仰
を有するに至つた。即ち茲に父なる神と子なる神との、たとい大小の差はあるとしても同一神性を保つた二つの神が
存在すると信ぜられるに至つた。茲に教主イエスを第二次的の神とする二元的唯一神教とも云うべき自己矛盾性に富
んだ唯一神教が教主を信仰の対象とすることに依つて生れ出した。斯なると教主の人格否神格を対象として夫に集中
し来たつた信仰が出来上り、其宗教信仰を掲げて立つてギリシャ、ローマの異国に布教伝道に行つたのが異邦人の使
徒パウロであつた。そこでイスラエルの宗教は是と余程様子の違つたギリシャ、ローマの思想界、今日の言葉で云え
ば科学哲学の思想と相接触するに至り、衝突もすれば融和もあり、遂にローマ大帝国の国教とまで基督教は上りつ
め、其神学はプラトン殊にアリストテレスの哲学をも援助に借りて遂にアウグスチヌス、アクイナスのカトリック神
学を大成し、後ルターが出るに及んで新方面から更に基督教神学に一步を進めたが、次第に斯なつて来ると基督教は
教主人格中心の宗教としては世界的普遍的の方面が教理の上にも宣教の方面にも現われて来るし、教主イエスが有し
て居つた唯一神の信仰も根を異民族の間に下して基督教の言葉を以て唯一神教の代表の如く世の中から認められる様
になつた。然し是は前にも述べた様に教主自身の信じて居つた神信仰と教主を対象として考えた神信仰としての基督

教とは相違が存するのである。私の用語で云えば、基督教は父子二神を立てた異常的二元教と見れば見られぬこともないのである。かかる影響は古代ベルシヤの宗教たる聖ザラツシュトラの二元教からも又その遠い系統の二元教からも尾を引いて来て居るとも考えられる。故にゲデン氏と云う宗教学者は其著書に於て、基督教は寧ろ人即神教と云うよりも人即神教の例に分類する方がよいとさえ主張して居る。斯うなると世界の宗教が何等かの点で其差異は差異として一致点を示して来る契機を存して居ることが知られる。そこで私は下の如く思う。神仏基の如き三教はピラミッドの底面をなす境界線たる三線を示すものとすれば、夫はビタミンA、ビタミンB、ビタミンC等の各々特色ある宗教ビタミンであるが是を一括綜合してピラミッドの一頂点の如く綜合ビタミンとしてみれば、神仏基三教の調和点が能く分るものと思う。斯様にして世界の宗教界には異軸同軌道型の宗教と異軸異軌道型の宗教も存在すると同時に其融合調和の一致点の存する事も看取することが出来る。故に私は結論する。「神仏基回は隣保の友、和して自信に忠なれば精醇を味合う」と帰結するのである。

尚本文の終りに臨んで一言附記することがある。私は今日迄「宗教学」（博文館刊）及び「宗教学精要」（錦正社刊）に於て教主イエスを神の子と見て取扱つて然も基督教全部に対して唯一神教の名称を与えて居つたが、其後の研究に依つて私見は本文の通り修訂したいと思うから右二書を披見せらるる諸賢は右様御諒承あらんことを希望する。

承 前

本論文は以上二回に亘つて私の木寿記念の年を以て同記念学会の諸君は寿会を催し、其當時に至る迄の主なる著書を要約して「神道信仰要系序論」の一著を公けにして下されたが、夫以後今日迄二三年を経過し其間更に私は未発表

の成果を盛込んで新パンフレット成るに随つて次々と公けにした。其間生祠の発表等で其結果から見た神道仏教基督教回教即ちイスラム教等多くの諸教の材料を役使して、かかる方面の新成果を公表して来た。其間まだ余り新人が発表しなかつた神道界の生祠より主として人即神教と呼ばれる神仏二教及び延いては仏教以前のバラ門教にも触れて其間の比較研究を行い、基回二教にも参約して人即神教の異同等をも比較研究し、論歩を進めていく中に私は突然脳裡に浮んで来た一種の仮定説に思付いた。西洋の近代学者は勿論日本の新しい頭脳を持った学者も一樣に基督教と云えば唯一神教即ちモノシズムと速断して憚らず是を自明の理であるように採用されて来て居った。然し夫は其儘正しいのか如何が究明する再考期に今は達していかないかという卑見が生れて来た。前回の論文でも一寸触れたが小異を捨て大同を採ればそれも云えない事はなかるうが、もう少し緻密に考へると所謂基督教なるものに於て此結論が余り大雑把過ぎるような感じを深くするに至つた。何故ならば基督教は其前程として旧約聖書に見えるような古代イスラエルの国民的宗教又は学者の所謂拝一神教に始まり教主イエスを経て、次第に嚴密な意味に於ての唯一神教が抬頭して来た。そこで新旧二教の過程を一括して唯一神教と内外の学者皆唱えて居った。然し少しく深く思いを回らすと新旧聖書の發達過程に於て教主イエスが生れる前にアモス、ホセヤ、イザヤ、エレミヤ等の高邁なる預言者達が排出して国民的唯一神教は茲にほんとうの意味に於る唯一神教面へと發達していった。そうなるとイエスも又其系統をとつて高邁な預言者中群を抜いたものであるからイエスの自から信じて居った宗教も進んだ意味の唯一神教と呼べないこともない。然しイエス以前のエライ預言者の神観は天然哲學的としても又は単に哲學的としてみても畢竟ヤーベ一の神に宗教的理想を帰結して居るのだから唯一神教に外ならない。然しそこに偶々今回比較考察を回らしていく中に教主イエスだけは前に列挙したような高邁思想の持主であつたと同様、唯一神教信者であつたとみても差支えないとしても遂に其思想の向上發展した結果信者の中からイエスは処架された後、三日経て其墓所は空となりイエスの肉

体は昇天して父なる神の許に行き、子なる神として神位に上ったと信ぜられるように至った。此信仰伝承に依ればイエスの死後直ちに父なる神、子なる神の二神位が信者の信仰界に出来上り、そういう大小二つの神を信ずるに至っては其教えは最早唯一神教ではなく、ペルシャの古い宗教のように二元教と呼ばねばならぬという考察が生じて来る。然るに夫をも含めてイスラエル正統の唯一神教中に収めてしまうのは学問研究の不精密を表白していると思ねばなるまいという教主イエス中心の唯一神教が二元教に事実上崩れて来た観がする。そうなるとイエス中心の神信仰から来た基督教はイエスの生存中三十年位は唯一神教であつても外の長い時代に於ては父と子との二元性を含んだ一種の二元教とも見られる。そこで今回私は長い伝統を打破つてイエス中心の基督教を他の古代イスラエル教の長い伝統たる唯一神教の系統を捨てて二元教的色彩の出で来た唯一神教とでも云わなければなるまいと考へて来た。故に私は前回の論文を結んで其結果を云えば、従来東西の諸学者は伝統の雲霧にかくされて此心眼が開かれていなかったのではないかと疑うに至った。既に述べたように私も種々比較宗教学上の書物を発刊したが、長く其昔風の考へに止まっていた。然しそこに学者の所謂誤りが私にも冒されて居ったのではなからうかと反省して来た。依つて前回の論文で新しい私の宗教学書たる「宗教学精要」に述べた伝統的基督教の唯一神教性を補正する時があると告白して同書の読者に私の不十分な旧い研究を伝統的に発表して長い波風の中に浮沈して居たことを寧ろ此際学者の面目に従つて公訂しておくべきではなからうかと考へて本誌前号に於て思いきり好く公表した。今翻つて考へると維新以来此方面の新しい学問が勃興し仏教界に於ては基督教という強敵が形影を出没させて来た事に恐れをなし、仏教界に於ては其特有の宗教性たる哲学と手を結んで此難儀な危急存亡の時期を抜出せうとする傾向がアリアリと見えて来て、以て今日に至つて居ることを回顧して将来我々の研究に取るべき進路や目的を仏教は勿論神道からも同時に考へておきたいと思ふ。故に左に其事柄を要約してみよう。

既に述べた通り教主イエス自身を父子一体の神と崇拝する意味を以て唯漠然と基督教は唯一神教で紀元前八世紀頃から出だした預言者等を一樣に唯一神教の語を以て是を取扱う習慣であったが、巨細に考えると理論的にはどうもそういかないという訳で、私は多年研究上の陋習を自から破壊して本誌の前号及び此号に於けるような学的研究発表を恥し乍らやるようになった。そこで多くの年月に亘った結論も放擲して旧習を脱皮し得ざる結論を学界に提起し諸賢の御批判を蒙りたき希望を起したのである。

夫と同様に神道にしる仏教にしるかかろる学過は人間である以上は止むなき事と御海容を願いたい。斯様に見て来ると維新当時より神仏二教が巖然として日本には存していたのに、明治時代になってから急に基督教信仰を人々の良心の自由であると政治上の扱いを受けた。茲に於て神仏殊に仏教学に於ては驚きの念にかられて是に對して一と奮発、反対の氣焰を盛上げねば仏教は基督教からやられてしまつて立行く将来があるまいと思ひ、幾多仏教界の学匠達が総がかりとなつて基督教調伏を計画し、著書に講演に實際的に活動された。其間此処では紙面がないため唯一例を挙げ、他の多くの例を略せばかの明治二十年頃井上円了博士が火蓋を切つて当時の名著「仏教活論」を公表し、基督教の名將高橋五郎氏等と渡合つたものだ。円了博士は思う。新旧兩約聖書の如き哲学から見れば如何にも幼稚な宗教で西洋に前例もあるが、仏教の高遠なる哲学説から基督教を破擯することは朝飯前の事だ。自分は此方面から基督教の牙城を打破つて立たれたのだ。是が有名な仏教活論だった。然し年月の経過と同時に円了博士がやられたように仏教が其中に潜めて居る印度哲学さえ鼓吹し發揮しさえすれば夫で死にかけた宗教らしい仏教は従前の通り蘇生するという訳にはいかない。矢張り仏教は哲学ではなくて宗教だから宗教面の正路に立つて其再興を計画せねばならぬという見解も出て来た。時に東京帝大で印度哲学講師を勤められた事のある真宗大谷派の吉谷覺壽師の如きは夫であった。此一二の例を挙げただけで一の宗教は他の宗教のために知らず識らず影響をうけつつある事が能く分る。然し理智が西

洋文化の余沢を受けていやが上にも向上し来たった仏教青年圈内はなかなかそんな生ぬるい話では始まらなかった。其ため仏教を一括して序論として仏教活論序論に続いてやれ禅宗活論序論とか真宗活論序論とか皆各宗各派を生かそうとする活論序論と題する明著が円了先生の筆に依って次々と世に現われて来た。然し流石の円了先生も真宗活論に至ってハタト付当られてしまった観があった。夫は何であるかと云えば真宗の御本尊は阿弥陀一仏という事になって居る。そうなると夫は所謂基督教の天に在す父なる唯一神とタント違わぬではないか、然るに西洋では宗教とは本道正路を異したギリシヤから伝わったところの学問又は哲学という精神的本街道があつて、是は西洋で行われて居る宗教道即ち新旧両約書とは大いに異っている。常に此二が衝突さえて居る。そこを円了先生はどう捌こうとするのか思わざる大問題にぶつかった。此処に於て真宗哲学序論が出版されるや、東大教授井上哲次郎博士に円了氏は此問題の解決には困った様相を真宗哲学序論で公表して居る。

夫を読むと真宗という此仏教の宗派こそ自分の遙籃中より其乳で育てられたのだから何とか弁護の方策を講じねばなるまいという急に迫られた。然し此問題の解決は西洋でも日本でもそう容易に決められてしまふだけの点に迄宗教文化は進んでいなかった。茲に於て仏教と云わず基督教と云わず事実困り果てた顔付きだったのだ。然も如何する訳にもいかない。夫なら此両教とも遅れ馳乍ら互いに研究の新街道に進んで手を携え仲良く出来る処は何処迄もやって行こうという仏基二教の飛離れた握手論者も出た。

当時のユニテリアン教会佐治突然氏の如きは其一例であつた。然し西洋でもそういう例はあつても日本に於る円了主義は云うまでもなく、合理派又は唯理派であつて宗教信仰の方から云えば西洋でも夫では始まらない。茲に西洋ではかかる合理派を離れて宗教は唯信仰一点張りで進め、極端に云えば宗教は不合理でも構わぬから唯感情的に又は伝統的に宗教が説いたところのものを有難く奉讀して居ればよいのだという突飛な説が湧出た。是は溯ればイエスの弟

子ポーロに基いてギリシヤ輸入以来の基督教テルツリアヌスの「不合理なるが故に我は信ず」と絶叫する事になる。是が日本に於る円了博士の合理主義に対して以外にも清沢満之師を総大将とした浩々洞一派の仏教の唯信仰主義というものであった。斯様な次第で仏教中にもカタヤ合理主義、カタヤ唯信仰主義という矛盾反対した考え方が対立し、遂に十分夫を一致調和させるに至らずして敗戦当時のダラシのない金銭又は唯物一点張りの社会相時代迄露呈し来たつて今日の如き唯物主義や社会主義など云える極端な社会相時代思想に平心低頭して居る悪風潮で社会人世が動いて居るのだ。ハマシヨルドの死もケネデーの死も矢張り茲に多少とも大淵源を以て居るとも考えられる。此悪風潮を匡正して狂瀾を既倒に回し、正路である義道を行き行き着くところは人間の安宅であるという理想楽地の真開拓に進むのが今日に於る教育家、道德家、宗教家等の当面に振かかつて居る焦眉の急用事である。

志ある人は頭燃の急を救うが如く各自其責任に於て其分を尽して欲しい。

×

×

×

ここ迄論じつめて来ると目下一の奇想天外とも云うべき事項が円了博士系統の思想界に抬頭して居るのが分る。世間ではまだ深く注意せぬかしれぬが、円了令息の井上玄一氏が実業界から隠遁して父業を一層完全にするために円了先生が計画して建てた東京郊外の大園遊地、学的思索者の天国とも云うべき哲学堂、夫は私設備がすっかり円了先生の出費で興隆させ、後東京市に寄附してしまつた有名な哲学堂等の財産を父祖の公的遺物として玄一氏に其名を止めた哲学堂をもう一層今日の時世相に能く合うように改善し、一般の進歩を遂げさせようとして玄一氏は私財を投じて其復興興隆を策して居られる。そこで私見を一言さしはさめば円了先生当時は哲学一本槍でそこに仏教を興隆せしめようとしたから、哲学堂は何等宗教的意味を加味していない。従つて釈迦、孔子、ソクラテス、カントの世界の四大聖人を祭つた堂は在つても宗教家は一人も宗教家としては祭られてはいない。現に釈尊の如きは夫である。今日とな

つては仏教とか基督教とかいう狭い眼光から見ないで、世界汎宗教から見た立場から神社のお宮に本社の外に撰社末社などある様に少くとも釈迦とイエスだけは取入れた宗教上の二聖をも祭祠堂を造って奉斎されたら如何かという考えが浮び出す。尚夫に付いては種々細部の考察もいるが話の序でに私は此衝口発言を以て本誌の読者に再考を期待しておく。

なお、本稿は聖徳太子鑽仰連盟の会報『聖徳』（編集兼発行人和田玄之）の昭和三十九年一月号及び二・三月号に発表されたもので当時の会員にのみ配布（タイプ印刷）されたものである。今回特に東京都港区鎮座乃木神社宮司高山亨氏のご厚意で、ここに掲載させて頂いた。この旨を付記して謝意を表する次第である。（事務局）